

*Guiding principle  
of the Spirit of prophecy*

# 預言の靈に関する 指導原理

Revival Booklet Series No.10



リバイバルシリーズ No.10

アーサー・L・ホワイト



SUNRISE MINISTRY

# 目次

## Contents

---

---

預言の霊の研究と使用に関する二十の指導原理…	1
E・G・ホワイトの経験における靈感とその働き…	8
靈感の証拠……………	18
幻と証の目的……………	23
エレン・G・ホワイトのその著作に対する態度…	25
もうひとりの特別の使命者が現れるだろうか	44
結 論……………	51

# 預言の霊の研究と使用に関する 二十の指導原理

エレン・G・ホワイト著書刊行委員会

アーサー・L・ホワイト

1. 預言の霊の使命は、主として、わたし個人に対するものである。  
使徒行伝 26 : 19 参照。

2. 特定の問題に関して与えられているすべての勧告を研究する。  
その全体をつかむこと。

「聖書が聖書によって説明されているように、証は、証そのものが、与えられた使命を説明する鍵になる」（セレクトッド・メッセージ第1巻42）。

3. 特定の勧告は、その事情の下において研究する。

例：「卵は、あなたの食卓においてはならない」（教会への証第2巻400）。

4. 特定なものについての勧告の時と場所を研究しなければならない。その場合は比較的まれ。

「証に関しては、無視したり、捨て去ったりするものはない。しかしその時と場所を考慮しなければならない」（セレクトッド・メッセージ第1巻57）。

例：a) 「教育」中、女子の実際的訓練の記事は、1903年に書か

れたものである。

「女の子が馬具をつけて、馬を御することを習うなら、人生の非常事態に直面してもまごつかないであろう」（教育 257）。

b) 自転車に関する証、教会への証第 8 巻 51、52。1894 年 7 月 20 日に書かれたもの。

「自転車が非常に流行した。その熱狂心を満足させるために、金が費やされた。魅惑的な力がその場所のわが教会の人々を波のように襲い・・・必要でもないのに欲望を満足させるために時間と金を費やさせているように思われた。・・・これは一種の偶像である。人々はそれぞれの自転車を速く走らせて競争し、優勝を争った。彼らの間には、だれが一番優れているか、という争斗と競争の精神があった」

### 歴史的背景

「前世紀の終わり頃、アメリカ人は、焼きつくすような熱に浮かされて、他のことのためには、時間も金もほとんど残されなかったほどであった。・・・この大きな新しい娯楽は何だったのだろうか。その解答を知ろうと思えば、商人たちは、窓の外を見て、以前の客が走り去るのを見ればよかった。アメリカは、自転車を発見し、すべての者は、自転車がもたらした新しい自由を最大に活用していた。・・・自転車は、金持ちのおもちゃとして始まった。上流社会の人々や名士が自転車に乗った。初期の最高級の自転車は 150 ドルもして、今日の自動車に匹敵する価格であった。・・・家族のひとりひとりが自転車に乗りたがって、全家族の貯金が、その要求に応えるために費やされたことがよくあった」（リーダーズ・ダイジェスト、1951 年 12 月）。

5. 根底に横たわる原則を見出して、それを今日にあてはめるようにする。

例：馬具をつけ、馬を御すること。

自転車を所有して乗ること。

スポーツに関する勧告（アドベンチスト・ホーム 574, 575）。

石造の病院の建物（教会への証第7巻 83, 4）。

## 6. 使命は、現代的である。

「神の声は、警告と教訓、預言の霊に対する信者の信仰の確立のために、聖霊によって、常にわれわれに与えられている。……時も試練も与えられた教訓の効力を失わせなかった。……この教会の初期に与えられた教訓は、その終末時代においても信頼できる教訓であると思わなければならない」（レビュー・アンド・ヘラルド 1907年7月18日、セレクトッド・メッセージス 第1巻41）。

「この教会の初期に与えられた原則は、当時と同様に、今日も重要で、同じように良心的に尊重すべきことを、わたしは示された」（教会への証第9巻158、1909年の世界総会に対する言葉）。

## 7. 使徒は、科学的に正しい。最近10年間の研究によって、60年から100年前に与えられた多くの勧告や警告が科学的に正しいものであることが証明された。

(1) タバコ（霊の賜物・第4巻128、ミニストリー・オブ・ヒーリング 300, 301）。

(2) がんの菌（ミニストリー・オブ・ヒーリング 288, 289）。

(3) 出産前の影響（ミニストリー・オブ・ヒーリング 342, セレクトッド・メッセージス 431）。

(4) 神経の中の電流（教会への証第2巻347、教育・234, 248, 教会への証第3巻157）。

(5) 塩（食事と食物に対する勧告 344, ミニストリー・オブ・ヒー

リング 281)。

- (6) イースト菌 (ミニストリー・オブ・ヒーリング 277)。
- (7) 精神身体医学 (教会への証第 3 巻 184)。
- (8) 生れながらの欠陥 (セレクトッド・メッセージス第 2 巻 442, 人類のあけぼの下 209, 210)。
- (9) 催眠術 (医療奉仕 111, 115, 116、セレクトッド・メッセージス 349, 350)。
- (10) 栄養と脂肪 (教会への証第 2 巻 61、食事と食物に対する勧告 393-394)。

#### 8. 使命の中に示された原則は、広く一般に適用される。

例：(a) 文書伝道事業に関するヨーロッパの経験

(b) アボンデール学校

#### 9. 疑いの余地はある。

(a) 聖書について (大争闘下 272)。

(b) 預言の霊について (教会への証 5 巻 675-676)。

「神は、われわれが信ずるに足る十分な証拠をお与えになったが、一方、不信に対する口実を全部取り除かれるわけではない。疑おうと思うなら、その余地はいくらでもある。そして、すべての反論が一掃され、疑う余地がなくなるまで、神のみことばを受け入れないで従わないなら、決して光にくることはできないのである。

神への不信は、新生を経験していない神に逆らう心の当然の結果である。しかし、信仰は、聖霊の靈感によって与えられるもので、それを大切に育てる時だけ成長するものである。だれも固い決意をもって努力するのでなければ、強い信仰を持つこと

はできない。不信は、助長すれば、深まっていく。そして人々が彼らの信仰を支持するために神がお与えになった証拠を心に留めずに、疑惑を抱き、とがめ立てをするならば、彼らの疑惑は、ますます深まっていくのである」(各時代の争闘下 272 英文)

## 証

「サタンは、神がお送りになる要点をついた証に疑惑を起させ、反対を考え出させる力を持っている。そして、多くの者は、疑ったり、理屈を言ったりすることが知性のしるしであって、善いことのように考えている。疑おうと思うものには疑う余地は多くある。神は、不信を起させる理由を全部取り除こうとされない。神は証拠をお与えになり、われわれすべては、それを謙遜な心と教えやすい精神をもって注意深く研究し、その証拠の重要性に応じて決定しなければならない。・・・神は、公平な心を持った者なら、信じることができる十分の証拠をお与えになった。しかし、有限な心で十分に理解することができない点が二、三あるからと言って、重要な証拠を拒否するものは、不信と疑惑の寒々とした冷氣の中に取り残されて、信仰の破船をしてしまう」(教会への証第5巻 675-676)。

## 信仰は証拠に基づく

「すべての不確実な影と疑惑の可能性が取り除かれるまで、信じることを拒めば、いつまでも信じることはできない。完全に知ることを要求する懐疑心は、信仰に屈服しない。信仰は、実証ではなくて、証拠に基づいている」(教会への証第5巻 69)。

10. 預言の霊は、(a)、信仰、(b)、熱心な努力、(c)、進取的精神、または、(d) 聖書研究の代わりに与えられたものではない。
11. ただ単に自分の結論を証明するだけでなく、勧告を見つけるために、預言の霊を研究しなければならない。

12. 伝道機関、または、個人に当てられた証を用いる時に、条件が変わることもあり得ることを心に留めていなければならない。

例：(青年への使命 386)「若い人々の中で経験を伴った宗教がなんであるかを知っている人は二十人にひとりもないことを私は示されました」年代は 1867 年。

13. 私の証の書研究の結論は、著書全体の主題と一致していなければならない。

14. 勧告は、一貫して適用されなければならない。一部を受けいれて、他の部分を拒否する自由はない。

「証のある部分は、神の使命として受け入れながら、彼らの愛好する放縱を非難する部分は、拒否する自称信者がいる。このような人々は、彼ら自身の幸福と教会の幸福に反する働きをしている。われわれは光を持っている間、光の中を歩くことが大切である」(教会への証第 9 巻 154)。

15. わたしは、勧告との関係において、絶対に自分に対して誠実でなければならない。わたし自身と他の人々に対して、私の態度が影響力を持っていることを認めなければならない。

16. わたしは、その指導原理を他の人も発見するように彼らに援助を与え、無理に強いるのではなくて、納得させなければならない。(衣服改革の経験)。(教会への証第 4 巻 636、また同第 6 巻 122 参照)。

17. わたしは、他の人々に寛大でなければならない。いろいろの人々が、種々の経験を経て、いろいろの異なった背景から来ている。各個人個人は、神と自分の良心に照らして、自分で決定しなければならないことがある。

18. 神は、到達すべき理想をわたしの前に示される。ある点においては、到達できなくても、失望してはならない。それには、時間がかかる。神の民が神の理想に到達しなくても、神は彼らを拒んだり捨てたりなさらない。

例：バトルクリーク大学と大学病院

19. 終始一貫して光をすべて受けいれて、それに従うならば、神は豊かに祝福してくださる。それは、わたしをこの世の苦難から救い、永遠の滅びを免れさせる（歴代下 20：20 参照）。

20. 承認を受けていないだれかの謄写版刷りのもの、また、一個人が発行した引用文集などでなく、E・G・ホワイト著書中の預言の霊の勧告を、わたしは読まなければならない。そのような引用文集を読む必要があると思えば、その一つ一つを、その著書全体の雰囲気の中で読まなければならない。

「むかし、神は預言者や使徒たちの口によって人々に語られた。この時代には、神は、神の霊の証によって人々に語られる。

神のみ旨と、神が人々に歩むことを望まれる道について、今、神が彼らを教えらるるほどに、熱心に神の民を教えられた時は、これまでになかった」（教会への証第 5 巻 661）。

「すべてのキリスト者は、原則に従って神に奉仕するように、研究しなければならない」（教会への証第 1 巻 161）。

「若い人は・・・かたい主義によって支配されなければなりません」（青年への使命 381）。

「神の言葉は、生活の正しい習慣を形成するための一般的原則にみちている。そして、一般および個人への証は、特にこのような原則にもっと注意を向けるように意図されたものである」（教会への証第 5 巻 663, 664）。

# E・G・ホワイトの経験における 靈感とその働き

## 1. 幻を受けたエレン・ホワイトの経験

最初の幻、「わたしが、家庭の礼拝で祈っていたときに、聖霊が私にくださった」（初代文集 62）。

「われわれ女性ばかり 5 人の者が、家庭の礼拝で静かにひざまずいていた。われわれが、祈っていると、これまで感じたことのないような神の力がわたしの上にくだった。わたしは、光に取り囲まれ、地上から高く高くあがっていくように思われた。この時、わたしは、再臨信徒の経験、キリストの再臨、忠実な者に与えられる報酬などを見た」（教会への証第 5 巻 654、655）。

「息がわたしの体に戻ったときに、わたしは何も聞くことができなかった。すべてのものは暗かった。……わたしは自分がどこにいるのかをたずねた。『あなたは、ここにいます。わたしの家にいます』とその家の所有主の「ヘインズ夫人」が言った。『何ですって？ここですか。わたしがここにいるのですか。そのことをあなたは知らないのですか』。それから、すべての事がわたしに戻ってきた。ここがわたしの故郷となるのであろうか。ああ、わたしの心には、何という圧迫感と重荷を感じたことであらう」（E・G・ホワイト遺稿 16, 1894 年, 残りの民への使命者 6）。

## 2. 幻を見ている時のエレン・ホワイトの経験

「主がわたしに幻を与えるのをよしとされたとき、わたしは、イ

エスと天使たちの前に連れて行かれる。そして、わたしは、地上のことは全くわからなくなる。わたしは、天使がわたしを導くことより先を見ることはできない。時々、わたしの注意は、地上に起こっている出来事に向けられた。

時には、はるか先の将来に連れていかれ、起こるべきことを示される。それから、また、過去において起こったことを見せられる」(霊の賜物第2巻 292, 1860年)。

### 3. 幻によって心に光が与えられる

「聖霊の光によって、長く続いた善と悪の争闘の光景が、これらの筆者に示された。時々、わたしは、いろいろの時代における大争闘の動きなどを見ることを許された」(各時代の争闘序文 8)。

「1906年4月16日、カリフォルニア州、ローマ・リンダにおいて、最も驚くべき描写がわたしの前に現れた。夜の幻の中で、わたしは高台に立ち、そこから家々が葦のように風にゆらぐのを見ることができた。・・・空気は、負傷者や恐怖におののく人々の悲鳴で満ちていた。・・・わたしの前にあらわれた光景の恐ろしさは、言葉で言い表すことができない。・・・わたしの心に最も生々しい印象を与えたものは、それと関連して与えられた教訓であった。わたしのそばに立った天使は言った、等」(教会への証第9巻 92, 93)。

「主は、主の民の必要と誤りをわたしに示すのをよしとされた」(教会への証第5巻 661)。

### 4. 証をたてる - エレン・ホワイトへの指示

「わたしがあなたに示したことを人々に知らせなさい」(初代文集 72)。

「神の霊がわたしの心に神の言葉の偉大な真理を展開し、過去と未来の光景を開いたときに、わたしはこうして啓示されたことを他の人々に知らせるように命じられた」（各時代の<sup>大争闘序文</sup>9）。

「わたしの働きの始めから」「わたしは、明白で要点をついた証をし、悪は、容赦なく責めるために召された」（教会への証第5巻678）。

## 5. 証を立てる - 神の霊に助けられて

「幻が終わったあとで、わたしは自分が見たものをすぐに全部思い出さない。そして、そのことは、わたしが書くまではっきりしない。しかし、書き出すと、幻の中に示されたのと同じような光景がわたしの前に現れて自由に書くことができる。時には、幻が終わったあとで、わたしの見たことがわたしに隠され、思い出すことができないことがある。ところが、その幻があてはまる人々の前にわたしが立つときに、わたしの見たことが、力強くよみがえる。わたしは、幻を見るのと同様に、話したり書いたりすることにおいても、主の霊に依存している。主が、わたしに話したり、書いたりすることを望まれるときに、幻に見せられたことを主が、わたしに示してくださらなければ、わたしは、それを思い出すことができない」（霊の賜物第2巻292, 293, 1860年）。

## 6. 彼女自身の言葉で表現された証

E・G・ホワイト「わたしは幻を受けるのと同様にそれを書くことにおいても、主の霊に依存しているけれども、わたしが見たことを描写するのに用いる言葉は、わたし自身のものである。ただし、天使がわたしに語った言葉は、常に引用符でかこんだ」（レビュー・アンド・ヘラルド1883年11月27日）。

世界総会決議、1883年、「神が、そのしもべたちに光をお与えになるのは（ごくまれな例は別として）思想が表現されている言葉そのものによるのではなくて、心に光を照らして、思想を分与することによるのであると、われわれは信じる。」（レビュー・アンド・ヘラルド 1867年10月8日）。

## 7. 話したり書いたりしている時、心に受ける光

「わたしは、人々に話しているときに、前に言おうと思っていなかったことを多く言う。しばしば、主の霊がわたしの上にくだる。わたしは、自分自身から全く引き離されるように思う。種々の人々の生涯と品性が、はっきりとわたしの心に示された。わたしは、彼らの誤りや危険を見る。そして、こうしてわたしに示されたことを話さなければならないと感じる」（教会への証第5巻678）。

「わたしは、このように書くことは少しも考えていなかった。しかし、主はわたしの心を次々と導いて、ついに、このようなものをお送りすることになった」（E・G・ホワイト手紙53, 1900年）。

## 8. 自分の著書に対するE・G・ホワイトの理解

### 書籍

「ホワイト夫人はこれらの書物の創作者ではない。これらの書物には、神が彼女の働きの期間を通してお与えになった教えが含まれている。これらには神が世の人々にお与えになる目的で、そのしもべに豊かにお与えになった尊い慰めの光が盛られている」（レビュー・アンド・ヘラルド、1903年1月20日、文書伝道125）。

### 記事

「ただわたし自身の考えを表現した記事は、1つも雑誌に書か

い。これらは、神が幻の中でわたしに示されたもので、御座から輝く尊い光の光線である」(教会への証第5巻67)。

## 手紙 (証)

「わたしは、弱々しく、震えながら、朝の3時に起きてあなたに手紙を書いた。神は、人間によって語っておられた。あなたは、この通信を単なる手紙であると思われたであろう。たしかにこれは手紙ではあるが、わたしに示されたことをあなたに知らせるために神の霊によって与えられたものである。わたしが書くこれらの手紙やわたしが伝える証の中でわたしが主がわたしに示されたことをあなたに伝えているのである」(教会への証第5巻67)。

## インタビュー

「彼 (G・A・アーウィン長老、世界総会総理) は小さいノートブックを持っていて、それにいろいろのむずかしい問題を書きとめ、わたしのところへ持ってくる。そして、もしわたしがそれらの点について、光をもっていれば、わたしは、アメリカだけでなく、この国の信者のためにも書く」(E・G・ホワイト手紙96、1899年)。

## 光がなかった時

「その問題 (14万4千はだれか) については、光がない。……どうか兄弟たちに、彼ら書いている事がらについては何もしめされていない、そして、わたしは、示されたことを伝えることができるだけであると伝えてほしい」(C・C・クライスラーの手紙中に引用されたもの、1914年12月8日)。

「わたしには将来の働きについて、兄弟たちに書く自由はない。なぜならば、主はそうすることをわたしにお委ねにならなかったからである。わたしは、あなたがどこに場所を定めるべきか、または、将来どうするべきかについて、何の指示も受けていない。……」

もし主が、あなたに関するはっきりした指示をお与えになったならば、わたしはそれをあなたに伝える。しかし、主がわたしに伝えるようにお与えにならないこと責任をわたしは負うことはできない」(E・G・ホワイト手紙 96, 1909 年、メッセンジャー 116)。

### わたしは話すことができた

「今朝、わたしは、ある問題を考慮するために召集された数名の選ばれた人々の会合に出席した。このような問題の考慮と勧告を求める手紙が彼らのところに来たのである。わたしは、それらの問題のいくつかについては、いろいろの時と場所において、多くの事が示されていたので、話すことができた。……

兄弟たちが手紙の所々を選んで読んだときに、わたしは、彼らに何と言うべきかがわかった。なぜならば、この事は、わたしに繰り返して示されたからである。……わたしは、ただいままでこの事について自由に書いてよいと感じなかった。他の伝道地と同じ方法では働くことはできないということであった……」(E・G・ホワイト遺稿 6, 1891 年、メッセンジャー 116)。

### エレン・ホワイトの意見、注意深く擁護された点

「1844 年の時が過ぎ去ったあとで、わたしは、兄弟姉妹たちと共に、もう罪人はだれも改心しないと信じた。しかし、わたしは、もう罪人は悔い改めないという幻を見なかった。この点について、わたしに投げかけられた非難を正当化するような言葉をだれもわたしから聞いたものはなく、また、わたしが書いたものを読んだ人もないことは、わたしが、明白に言うことができる」(E・G・ホワイト手紙 2, 1874 年、セレクトッド・メッセージズ 第 1 巻 74)。

「- に送った証のなかで、わたしは、神がわたしにお与えになった光を伝えた。いかなる場合にもわたしは、自分自身の判断や

意見を言わなかった。わたしは、わたし自身の意見にたよらなくても、示されたことで書くべきものが十分にあるのである」(バトルクリーク教会への証 1882年 58)。

「わたしの考えていることを言わせて頂きたい。しかし、それはわたしの考えではなくて、主の言葉である」(筆者と編集者への勧告 112)。

## 9. 幻と、ホワイト夫人の証との関係

(a) 証、一つの幻の直接の説明「1850年8月24日に、わたしは・・・見た」(初代文集 131)。

(b) 証、多くの幻の合成的説明、大争闘シリーズ

「時々、わたしは、いろいろの時代における大争闘の動きなどを見ることをゆるされた」(各時代の争闘序文 8)。

(c) 証、特定の幻に基づいた勧告、「1907年、3月2日の夜、われわれの出版物の価値に関して多くのことがわたしに示された」(教会への証第9巻 65)。

(d) 証、多くの幻に基く累積的勧告、「神はあなたが子供を扱うように、子供たちを扱う親たちのための譴責の証をわたしにお与えになった」(E・G・ホワイト手紙 1, 1877年)。

「この事は、同類のことについて、自分たちは、セブンスデー・アドベンチスト教会に対して使命を持っていると主張した他の人々の場合に、わたしに示された。そして『彼らを信じるな』という言葉がわたしに与えられた」(E・G・ホワイト手紙 16, 1893年、セレクトッド・メッセージス第2巻 63, 4)。

パウロの経験の参照「パウロは靈感を受けた使徒であったが、主は、神の民の状態がどういうものであるかをいつも彼に示されなかった。教会の繁栄に関心を持っていた人々が、教会に害悪が侵入しているのを見て、そのことを彼に話した。そして、彼は、

以前に受けた光に照らしてみても、こうした事情の真相を判断することができた。主は、その特別の時のために新しい啓示をお与えにならなかったからといって、真に光を求めていたものは、彼の使命を単なる一般の手紙として、捨て去らなかった。決してそうしなかった。主は、彼に、教会の中に起こる困難と危険とを示された。それが起こったならば、彼は、それをどのように扱うべきかを知ることができるのであった。

彼は、教会を擁護するために立てられた。彼は、申し開きをしなければならぬ者のように、魂を見守り、無秩序状態や分裂に関する報告に心を奪われてはならなかった。そして、彼が彼らに送った譴責は、彼のどの手紙とも同様に神の靈感によって書かれたものである」(教会への証第5巻65, 6)。

## 10. 靈感が主張されていないところ

(a) 伝記的文章〈霊の賜物第2巻、1860年、彼女の経験記〉を準備するに当たって、わたしは、大きな不便を感じながら苦勞した。というのは、わたしは、ほんの数年前まで日記をつけていなかったもので、多くの場合、記憶にたよらなければならなかったからである。わたしは数回にわたって、記述した事情が起こった時に居合わせた友人たちに原稿を送り、印刷に回す前に彼らに調べてもらった。わたしは、単純な事実を出来るだけ正しく述べるように努めて、注意深く多くの時間をかけた。

しかし、わたしは、自分の書いた多くの手紙によって、年代を決定するのが大いに助かった」(霊の賜物第2巻序文)。

〈注、これを1858年に発行された「霊の賜物」第1巻と比較すること。ここに大争闘の物語りの主要な点が述べられている。幻は、1858年3月14日に与えられて、219の書物が9月に発行

された。この書物全体を通じて、200回以上も、「わたしは見た」などと言う言葉がある。この書物は、幻に基づいていて、伝記物は別として、彼女の典型的著述法である質問をしたり、資料を集めたりすることをせずに、早く完成された)

(b) 日常の普通の事を書いたり、話し合ったりすること。

「普通のことを言い、普通の事を考え、普通の手紙を書くことが必要なときがある。また、知らせが働き人から働き人に伝わるがあった。このような言葉や知らせは、神の霊の特別な靈感によって与えられたものではない。時には、全然宗教的でない問題について質問を受けることがあって、そのような質問に答えなければならない。われわれは、家や土地、なすべき商売、われわれの伝道機関の場所、その有利な点や不利な点について話さなければならない」(E・G・ホワイト遺稿 107, 1909年、セレクテッド・メッセージス第1巻 39)。

## 11. 「わたしは見た」と「わたしは示された」

ホワイト夫人は、一般の読者のための書物の中からは、「わたしは見た」と「わたしは示された」という表現を全部取り除かれた。それは読者が彼女の経験をよく知らないから、使命そのものから心をそらすことがないためであった。大争闘シリーズ5巻にこのような表現を見つけることはできない。しかし、このシリーズの最初に1888年に出版された各時代の争闘序文において、ホワイト夫人は、このような事件が起こるのを目撃し、「あらわされたことを他の人に知らせるように命じられた」ことを明らかにしている(11)。キリストへの道、祝福の山、キリストの実物教訓、教育、ミニストリー・オブ・ヒーリング参照。「ホワイト夫人は、これらの書物の創作者ではない」と書いた。

伝記的著作以外のもので、ホワイト夫人が、公けにされた著作は、「わたしは見た」という表現があるなしにかかわらず彼女に与えられた幻に基づいている。彼女は、その時代において、書物と手紙という区分でなくて、神聖なことと普通のことという区別をされた。われわれも、今日同様である。知性のある人は混乱におちいることはない。

# 靈感の証拠

## 1. 70年以上にわたる教えの一致

10万に及ぶ重要でしばしば特殊な問題を扱った書物、記事、遺稿などは、様々な状況の下で書かれ、時には不便な状況下で書かれたけれども、その教えには完全な一致がある。

## 2. 聖書の4大テストに完全に合致する

- a) 律法（教え）とあかし（イザヤ 8：20）
- b) 預言の成就（エレミヤ 28：9、申命記 18：22）
- c) キリスト教信仰の真理に忠実（Iヨハネ 4：1, 2）
- d) その実によって知る（マタイ 7：16, 20）

## 3. 信者の生活と教会の活動に実が見られる

一般の新聞記事、1915年、「真理に固く立った『残りの教会』への約束として、預言の霊が与えられることになっていた。この信仰は、生活を大いに清め、絶え間のない熱心をもたらした。道徳的品性と宗教的熱誠において彼らに勝るキリスト教団体はない。彼らの働きは、1853年にバトルクリークで始まり、今では、全世界に37の出版所を持ち、80の異なった国語で文書を発行し、年間、200万ドルの本を印刷している。彼らは現在、70の大学、高校、中学校を持ち、約40の病院を持っている。このすべてにおいて、エレン・G・ホワイトは、靈感であり、指導者であった。ここに気高い記録がある。そして、彼女は大きな榮譽に値する」（ザ・インディペンデンス（新聞）1915年8月23日）。

## 4. 科学的発見は、E・G・ホワイトの50年から98年前の医学的分

## 野における言葉を確証する

これらの言葉のあるものは、当時の分散した1、2の声と一致した点があるにせよ、彼女は、どうして真理と誤りとを区別することができたのであろうか。F・D・ニコルは、コーネル大学のクライブ・マッケイ博士について、次のように報告した。「彼は、これが始めに唱えられたときに、その時代よりはるかにわれわれの健康に関する教えが進んでいたことに驚いた。また正式の教育はわずかしかうけなかったホワイ夫人がよい栄養について、これほどの多くのことすでに知っていたことは全く理解できなかった。彼女は、善い考えを選び、悪い考えを拒絶することができたのであろうか。こう叫んで彼は、ホワイ夫人が他人の考えを単に借りることがあり得なかったことを強調した」(レビュー・アンド・ヘラルド、1961年10月26日)。

### 5. 多くの使命は、天からの光によらなければ知り得ない人間経験、または教会の経験を知っていることを示した

D・T・ボードー、開拓時代の指導者、「ホワイ夫人はただ主から示されただけであるいろいろの伝道地の特徴を正しく描写し、・・・肉眼では会ったことのない人々の事情を次から次へと描写するのを聞くことは、何と興味深く驚くべきことであつたろう。・・・『もう十分だ。わたしは、その純粋性についてこれ以上の証拠はいらない』と叫ばずにはおられなかった」(レビュー・アンド・ヘラルド、1885年11月10日、E・G・ホワイトが出席したヨーロッパ年会の報告)。

ユライヤ・スミス、開拓者、長年、レビュー・アンド・ヘラルド編集長、「その実は、悪とは全く反対の源泉からわき出たものであることを示している。それらは、最も清い道徳を助長する。それらは、すべての悪を非難し、すべての徳の実行を勧める。それらは、天国への道中で通過しなければならない危険を指示する。それらは、サタンを暴露する、サタンのわなについてわれわれに警告を発する。それらは、敵がわれわれの間に

侵入させようとした狂信の策略を次から次へと未然に防いだ。それらは、隠れた罪悪を暴露し、潜伏している不正をあらわし、裏切り者の凶悪な策略を暴露した」（レビュー・アンド・ヘラルド 1866 年 6 月 12 日）。

E・G・ホワイト「ある力がわたしを駆りたてて、わたしが考えもしなかった不正を非難し譴責させた」（教会への証第 5 巻 671）。

『「一体、だれがこのようなことをホワイト夫人に書いたのだろうか』という言葉で今も不信が表明されている。しかし、その実情を知っている人があると思わない。また、そうしたことがあるとも思わない人が書けるとも思わない。だれかがわたしに語ったのである。それは、偽りを言わず、誤った判断をせず、事情を誇張することのないお方である」（「レビュー・アンド・ヘラルドの事務室とバトルクリークの働きに関する特別の指示」16）。

## 6. 使命の適時性

例：

- (a) 1871 年にカリフォルニアに送られた使命（「彼の預言者を信ぜよ」110-112 参照）。
- (b) 偽りの預言者について、オーストラリアからバトルクリークの A・T・ジョーンズに 1893 年に送られた使命「彼の預言者を信ぜよ」113-117 参照）。
- (c) 汎神論についてカリフォルニアからワシントン D・C の A・G・ダニエルズに 1903 年 10 月に送られた使命「永久的預言の賜物」330-342 参照）。

## 7. 内的証拠の実証

- (a) 読む者の心に語る使命の伝え方
- (b) しばしば見えない危険、または隠れた罪を指摘した教正と譴責の個人的証、また、生活と習慣の根本的变化に対する呼びかけが受け入れられた方法は、それを受けた人が、この使命は単なる人の話や噂や個人的意見ではなくて、靈感によって与えられたものであるということを十分に確信したことを示している。

### 典型的返事

「愛する姉妹、1月21日付の親切なお手紙は2日前に受け取り、わたし自身で注意深く数回読みました。

お与え下さった注意を感謝します。これは時期を得たものでした。わたしはこれを天からの声として受け入れます。わたしは自分の品性に多くの弱点を持っており、創造主の前に傷なき者として立つことができる前に、勝利しなければならないことがたくさんあります。・・・わたしはキリストがわたしのために勝利して下さり、わたしがこの勝利を自分のものとして、彼のために保つべきことを望んでおられることを知っています。わたしは、これを主の名によってしようと思えます。心からのおしかりをもう一度感謝いたします。(署名)(1901年2月20日海外で働いていた医者)。

「愛するホワイト夫人、たくさんの警告と譴責のお言葉、特に昨日の朝頂戴したことについて、少しの説明と感謝を申し上げなければなりません。これらの事について、わたしがどう考えているかをそのままお伝えする言葉がありません。わたしは、あなたの言葉に対して無関心であったとは思っていません。ただわたしの場合、当惑してそれを全部自分に当てはめられませんでした。・・・わたしは今、それを受け入れて、自分に理解できたことを実践していたならば、やがては、すべてが理解できるようになっただろうと確信しています。・・・

わたしはあなたの手紙を昨日頂いてほんとうにうれしく思いました。それは、弱々しいものではありませんが、祈りにたいする直接の答えとして来たように思われました。わたしは、今、熱心な祈りと、神の言葉の研究とによって、何が義務であるかを学び、それを実行するように固く決心しています。・・・わたしは主との永続的親しい交わりを持つことができるように、主がわたしに望まれることを何でもしたいと思っています。

（署名）（女医）

# 幻と証の目的

それは次のものではない

1. 「神の言葉への追加」ではない（教会への証第5巻663）。
2. 「新しい光を与えるためでない」（教会への証第5巻665）。
3. 「新しい信仰の規準ではない」（経験と幻64, 初代文集78）。

それは次のようなものである

1. 「神の民の慰めのため」（経験と幻64, 初代文集78）。

「落胆して失神しそうな魂を励ますため」（レビュー・アンド・ヘラルド1856年1月10日, 残りの民への使命53）。

2. 「聖書の真理から誤り出るものを教正するため」（経験と幻64, 初代文集78）。

「誤った者を教正し譴責するため」（レビュー・アンド・ヘラルド1856年1月10日, メッセンジャー53）。

「もっともらしい誤りを教正するため」（手紙117, 1910, メッセンジャー82）。

3. 「神の民に神の言葉を思い起こさせるため」（教会への証第5巻663）。

「神は、証によって、すでに与えられた大真理を単純にされた」（教

会への証第 5 巻 665)。

「すでにあらわされた靈感による真理を心に明白に印象づけるため」(教会への証第 5 巻 665)。

4. 神のみこころに関して教えるため (教会への証第 5 巻 661)。
5. 「神が彼らに進むことを望まれる道」について教えるため (教会への証第 5 巻 661)。
6. 「生活の正しい習慣を形成するための聖書的原則に注意を促すため」(教会への証第 5 巻 663, 664)。
7. 「神と同胞に対する人間の義務」を明らかにするため (教会への証第 5 巻 665)。

「彼らの義務にめざめさせるため」(教会への証第 5 巻 665)。

8. 「真理が何であることを明示するため」(手紙 117, 1910 年, メッセージャー 82)。

「神の力が真理とは何かについて証をするとき、その真理は、真理として永遠に確立する」(セレクトッド・メッセージス第 1 巻 161)。

9. 「わが民がとった立場について彼らの信仰を確証するため」(レビュー・アンド・ヘラルド 1907 年 1 月 18 日, セレクトッド・メッセージス第 1 巻 41)。
10. 神の民に「全く見解の一致と同じ心」を持たせて教会の一致をはかるため (教会への証第 3 巻 361)。

# エレン・G・ホワイトの その著作に対する態度

(教会への証第5巻 654-691 参照)

## 1. 幻を受けたエレン・ホワイトの経験

### 最初の幻

「私が家庭の礼拝において祈っていたときに、聖霊がわたしの上にくだった」(初代文集 62)。

「われわれ、女性ばかり5人の者が、家庭の礼拝で静かにひざまずいていた。われわれが祈っていると、これまで感じたことのないような神の力がわたしの上にくだった。わたしは、光に取りかこまれ、地上から高く高くあがっていくように思われた。この時、私は、再臨信徒の経験、キリストの再臨、忠実な者に与えられる報償などを見た」(教会への証第5巻 654, 5)。

「息がわたしの体に戻ったときに、わたしは何も聞くことができなかった。すべてのものは暗かった。……わたしは自分がどこにいるのかをたずねた。『あなたはここにいます。わたしの家にいます』とその家の所有者の〔ヘインズ夫人〕が言った。『何ですって、ここですか。わたしがここにいますのですか。あなたはそのことを知らないのですか』それから、すべての事がわたしに戻ってきた。ここがわたしの故郷となるのであろうか。わたしはもう一度ここへ来たのであろうか。ああ、わたしの心には何という圧迫と重荷を感じたことであらう」(E・G・ホワイト遺稿 16, 1894年, 残りの民への使命者 6)。

## 2. 召命の確信 1845年

### 疑わなかった

「わたしは、困乱して、時には、わたし自身の経験を疑うように試みられた。ある朝、家庭の祈りの時に、神の力が私の上にとどまり始めた。するとわたしは、これは催眠術であるという考えが起こった。そして、わたしは、それに抵抗した。わたしは直ちに物が言えなくなった。……その後わたしは疑わなかった。また、他の人々がわたしのことを何と考えようとも、神の力に一瞬でも抵抗しなかった」(初代文集 22, 23)。

## 3. 幻を無視することは危険である

「わたしは、現代の真理に立ちながら、幻を無視した幾人かの人々の状態を見た。幻は、神が聖書の真理から誤っていった人々を教えるために、時として、選ばれる方法である。彼らは幻に反抗することによって、神が語られた弱い虫のような器に反抗するのではなくて、聖霊に反抗したのであることをわたしは見た。器に反抗して語ることは小さいことではあるが、神の言葉を軽視することは危険なことであるのをわたしは見た。もしも彼らが誤っていて、神が幻によって彼らの誤りを示そうとされたのであるにもかかわらず、彼らが、幻によって与えられた神の教えを無視するならば、彼らは、彼ら自身のなすがままに放置され、誤りの道を走り、自分達は正しいと考えつつ、ついに気がついた時には手おくれになってしまうのである」(ブロードサイド「生ける神の印を受ける者へ」1849年1月31日、セレクトッド・メッセージズ第1巻40)。

## 4. 現代に与えられた理由

### 最初の書物 1851年

「愛する読者よ、あなたの信仰と行為の基準として、神の言葉を推薦する。われわれは、その言葉によって審かれる。神は、そ

の言葉の中で「最後の時代」に幻を与えると約束された。それは信仰の新しい基準ではなくて神の民の慰めのためと、聖書の真理を誤る者を教正するためである」（経験と幻 64, 初代文集 78）。

## 5. E・G・ホワイトの働きは聖書の預言者の働きと同じ

### この時代に

「むかし、神は、預言者や使徒たちの口によって人々に語られた。この時代には、神は神の聖霊の証によって人々に語られる。神のみ旨と神が人々に歩むことを望まれる道について、今、神が彼らを教えられるほどに、熱心に神の民を教えられた時は、これまでになかった」（教会への証第5巻 661）。

## 6. E・G・ホワイト著書と聖書の関係

### 小さい光

「彼らは聖書に心を留めなかった。そこで神は人々を大きい光へ導くために小さい光をお与えになった」（レビュー・アンド・ヘラルド 1903年1月20日、文書伝道 125）。

### 聖書によって試された

「聖霊は、聖書に取って代わるものとして与えられたものでなく、また与えられ得るものではない。何故ならば、すべての教えと経験が試される標準は、神の言葉であると聖書は明白に述べているからである。『ただ律法とあかしとに求めよ。彼らはこの言葉によって語らなければ、彼らの中に光がない』とイザヤはいつている（イザヤ 8:20 英語訳）」（各時代の争闘序文 4）。

## 7. 新しい光を与えるためではない

「J兄弟は、神が証によってお与えになった光を神の言葉につけ加えるもののように見せようとして、心を混乱させている。しかし、彼は、これを誤って解釈している。神は、このようにして、人々の心を神の言葉に向けさせ、彼らにそれをはっきり理解させようとなさった。神の言葉は、どんなに暗くなった心をも明るくするのに十分な力があり、それを理解しようと望む者は理解することができるのである。しかし、それにもかかわらず、神の言葉を研究していると称する人々の中には、その明白な教えと全く反対の生活をしている人がある。そこで神は人々が申し訳をする余地がないようにするためにはっきりと要点をついた証を与えて、彼らが、従うことを怠っていた神の言葉に彼らを引き返らせられるのである。神の言葉は、生活の正しい習慣の形成のための一般的原則に満ちている。そして、一般および個人への証は特にこのような原則にもっと注意をむけるように意図されたものである」(教会への証第5巻 663, 664)。

「書かれた証は、新しい光を与えるためではなくて、すでにあらわされた靈感による真理を心に生々しく印象づけるためである。神と同胞に対する人間の義務は、神の言葉の中に明示されているが、あなたがたの中で与えられた光に従っている者は少ない。追加的真理は与えられていない。しかし、神は証によって、すでに与えられた大真理を単純にされた。そして、神ご自身が選んだ方法によって、それらの人々に示し、彼らを覚醒させ、彼らの心に印象を与え、すべての者が弁解をする余地のないようにされた。…証は、神の言葉を軽んじるためではなくて、それを高め、人々の心をそれに引きつけ、真理の美しい単純さにすべての者の心が打たれるようになるためである」(同 665)。

## 8. 誤りを正し、真理が何であることを明示するため

「主は、人々に持たせようと望まれた多くの光をわたしにお与えになった。なぜならば、主がわたしにお与えになったのは神の民のためであるとの指示があるからである。それは、教訓に教

訓、ここにも少し、かしこにも少し、彼らが持つべき光である。それは、今、人々の前に現れるべきである。なぜならば、それは、もっともらしい誤りを正し、真理が何であるかを明示するために与えられたからである。主は、真理を指示して多くのことを啓示し、これが道である。ここを歩けと言われるのである」（手紙 117, 1910 年、残りの民への使命者 82）。

## 9. エレン・G・ホワイトは預言者、使命を持った使命者であったか

「わたしは預言者であるとは主張しないと言ったことにつまずいた人々がある。彼らは、それは何故かと聞いた」。

注:これは 1904 年 10 月 2 日、バトルクリークにおける話の中で、「わたしは女預言者であるとは主張しない」と言われたことに関するものである。

「わたしは、主の使者であると教えられたということ以外に、何の主張もしたことがない。主は、わたしが若かった時に、彼の使者として召し、彼の言葉を受けて、主イエスの名によって、明白で決定的使命を伝える者とされた。わたしが若い頃、あなたは預言者ですかとよく聞かれた。わたしは常に、わたしは主の使者ですと答えた。わたしは、多くの人々がわたしを預言者と呼んだのを知っているが、わたしはこの称号を主張したことはない。わたしの救い主は、わたしが彼の使者であると言われた。わたしは、なぜ預言者であると主張しなかったのだろうか。それは、この時代に、預言者であると大胆に主張する多くの者が、キリストのみわざの恥辱となっているからである。また、わたしの仕事は、「預言者」という言葉の意味よりは、もっと多くのもを含んでいるからである」（レビュー・アンド・ヘラルド 1906 年 7 月 26 日、セレクトッド・メッセージス第 1 巻 31, 32）。

## E・G・ホワイトの働きに関する W・C・ホワイトの言葉

「母が女預言者であることについて。母の心の中で、また家族の

者や手伝って下さる全ての人々の心の中で、母が主の預言者であるということには何の疑いもないことである。しかし、母は、このことについてバプテスマのヨハネがとったのと同じ立場を取るのである。どうか、ヨハネによる福音書1章の19-23節を読んでもらいたい。そうすれば、ヨハネが、謙遜に自分は、エリヤでもあの預言者でもないと言っているのに気付かれるであろう。「主の道をまっすぐにせよと荒野で呼ばれる者の声である」と彼は言った。しかし、我々はキリストの言葉から、ヨハネはエリヤであり、預言者であったことを知るのである。母は、彼女の働きについて「わたしは、預言者と呼ばれたくない。わたしは使命を持った使命者である」と言っている。しかし、「彼女は、自分が預言者でないとは言ったことがない」(W・C・ホワイトからJ・J・コレルにあてた手紙1904年5月13日)。

## 10. 預言者の働きと、それ以上のもの

「話しの中で、わたしは、女預言者であることを主張しないと言った。この言葉を聞いて驚いた人があって、それについていろいろの事が言われているので、説明しようと思う。他の人は、わたしを女預言者と呼んだが、わたしはその称号を称えたことはない。わたしは、そのように自分を呼ばなくてもよいと感じた。自分を現代の預言者であると大胆に称える人々は、しばしば、キリストのみわざの恥辱となっている。わたしの仕事は、この名が意味するよりも以上のものを含んでいる。わたしは、神の民のための使命を、主に委ねられた使命者であると考えている」(手紙55, 1905年, セレクトッド・メッセージズ第1巻35-36)。

「わたしの働きの性質について、推測をたくましくしている人々に、わたしの仕事を妨害されてはならないことが、今、わたしに教えられた。彼らは、預言者の働きはどうあるべきかということに関する多くの複雑な問題に心を悩ませている。わたしが受けた任命は、預言者の働きを含むが、それだけではない。それは、不信の種をまいている人々の理解をこえたはるかに多く

の事を含んでいるのである」(手紙 244, 1906 年【バトルクリーク教会の長老にあてたもの】，セレクトッド・メッセージ第 1 巻 36)。

## 11. 幻を見ている時のエレン・ホワイトの経験

「主がわたしに幻を与えるのをよしとされたとき、わたしは、イエスさまと天使たちの前に連れていかれる。そして、わたしは、地上のことは全くわからなくなる。わたしは、天使がわたしを導くより先を見ることはできない。時々、わたしの注意は、地上に起こっている出来事に向けられた。時には、はるか先の将来に連れていかれ、起こるべき事を示される。それから、また、過去において起こったことを見せられる」(霊の賜物第 2 巻 292, 1860 年)。

## 12. 幻によって心に光があたえられる

「聖霊の光によって、長く続いた善と悪の争闘の光景が、これらの著者に示された。時々、わたしはいろいろの時代における大争闘の動きなどを見ることを許された」(各時代の争闘序文 8)。

「1906 年 4 月 16 日、カリフォルニア州、ローマ・リンダにおいて、最も驚くべき描写がわたしの前に現れた。夜の幻の中で、わたしは高台に立ち、そこから家々が葦のように風にゆらぐのを見ることができた。…空気は、負傷者や恐怖におののく人々の悲鳴で満ちていた。…私の前にあらわれた光景の恐ろしさは、言葉で言い表すことができない。…私の心に最も生々しい印象を与えたものは、それと関連して与えられた教訓であった。わたしのそばに立った天使は言った。…」(教会への証第 9 巻 92, 93)。

「主は、主の民の必要と誤りをわたしに示すのをよしとされた」(教会への証第 5 巻 661)。

### 13. 証をたてる・エレン・ホワイトへの指示

「わたしがあなたに示したことを他の人々に知らせなさい」（初代文集 20）。

「神の霊がわたしの心に神の言葉の偉大な真理を展開し、過去と未来の光景を開いたときに、わたしはこうして啓示されたことを他の人々に知らせるように命じられた」（各時代の争闘序文 9）。

「わたしの働きの始めから」「わたしは、明白で要点をついた証をし、悪は容赦なく責めるために召された」（教会への証第 5 巻 678）。

### 14. 証を立てる - 神の霊に助けられて

「幻が終わったあとで、わたしは自分が見たものを全部すぐに思い出さない。そして、そのことは、わたしが書くまでははっきりしない。しかし、書き出すと、幻の中に示されたのと同じような光景がわたしの前に現れて自由に書くことができる。時には、幻が終わったあとでわたしの見たことがわたしに隠され、思い出すことができないことがある。ところが幻があてはまる人々の前にわたしが立つときに、わたしの見たことが力強く心によみがえる。わたしは幻を見るのと同じように、話したり書いたりすることにおいても、主の霊に依存している。わたしは主がわたしに話したり書いたりすることを望まれるときに、幻に見せられたことを主が示してくださるのでなければ、わたしは思い出すことができない」（霊の賜第 2 巻 292, 293, 1860 年）。

### 15. 彼女の使命の誠実性

「わたしは見たこと、そして、真実であるとわかったことを語る」（手紙 4, 1896 年）。

「あなたが人々に伝えるときは、いつも主が語られた者のように語りなさい。主が、あなたの権威である」(手紙 186, 1902 年)。

「聖霊によって、神の声が絶えず、警告、訓戒としてわれわれに与えられ、預言の霊に対する信者の信仰を固くする。わが民がとった立場に対する彼らの信仰を確証するために、わたしがあなたに示したことを書きなさいという言葉が繰り返され与えられた。時と試練は、与えられた訓戒を無効にしなかった。この教会初期に与えられた訓戒は、その最後の時代にも従うべき間違いのない訓戒と思うべきである」(レビュー・アンド・ヘラルド 1907 年 7 月 18 日、セレクトッド・メッセージス第 1 巻 41)。

「わたしの意見は、書物または、他の人々の意見とは無関係に書いたものである」(手紙 1867 年、わが健康使命の物語に引用、78)。

「神は、神の教会を教え、その不正を譴責し信仰を強めておられるか、それともそうでないかのどちらかである。これは神の働きであるか、それともそうでないかである。神は、サタンと共同で何もされない。わたしの働きは神の印をおびているか、それとも敵の印を帯びている。この事において中途半端はない。証は、神の霊からのものであるか、それとも悪魔からのものである」(教会への証第 4 巻 230)。

## 16. それはホワイト夫人の意見であるか

「わたしの経験において、ある種の人々のとった態度に当面しなければならぬことが何回もあった。彼らは証が神からのものであることは認めたが、これとあれとは、ホワイト夫人の意見と判断であるという立場をとった。これは譴責や教正を好まない人々に好都合であって彼らは、自分たちの考えに合わないことがあると、それを理由にして、証は人間からのものか、それとも神からのものかと言い出すのである。

もし先入観や独得の考えの持主は、証の譴責によって非難されると、直ちに、証の区別を明確にすべきであるという立場をとる。彼らはホワイト夫人の人間の判断と主の言葉を明確にしようとする。彼らの好む考えを支持するものは神のもので、彼らの誤りを教正する証は、人間的で、ホワイト夫人の意見であると思う。彼らは伝説によって神の勧告を無力にする」(E・G・ホワイト遺稿 16、1889年)。

「-に送った証の中で、わたしは、神がわたしにお与えになった光をあなたに伝えた。どのような場合にも、わたしは自分自身の判断または意見を言わなかった。わたしは、わたし自身の意見にたよらなくても、示されたことで書くべきものが十分にあるのである」(バトルクリーク教会への証 1882年, 58)。

「わたしの考えていることを言わせて頂きたい。しかし、それはわたしの考えではなくて、主の言葉である」(筆者と編集者への勧告 112)。

「主の勧告と譴責を捨て去り、神の霊の証を人間の知恵以上のものではないとしてしまった者を救うために、主はどんな予備の力をもっておられるであろうか。審判のときに、このようなことをした者は神がその働きの中におられたという神からの証拠を拒絶した申しわけとして神に何と言うであろうか」(牧師への証 466)。

## 17. 自分の著書に対するE・G・ホワイトの理解

### 書籍

「ホワイト夫人(三人称で書いている)はこれらの書物の創作者ではない。これらの書物には、神が彼女の働きの期間を通してお与えになった教えが含まれている。これらには神が世の人々にお与えになる目的で、そのしもべに豊かにお与えになった尊い慰めの光が盛られている」(文書伝道 125)。

## 記事

「ただわたし自身の考えを表現した記事は、一つも雑誌に書かない。これらは、神が幻の中でわたしに示されたもので、御座から輝く尊い光の光線である」（教会への証第5巻67）。

## 手紙（証）

「弱々しく、震えながら、わたしは朝の三時に起きて、あなたに手紙を書いた。神は人間によって語っておられた。あなたは、この通信を単なる手紙であると思われたであろう。たしかにこれは手紙ではあるがわたしに示されたことをあなたに知らせるために、神の霊によって与えられたものであった。わたしが書くこれらの手紙や、わたしが伝える証の中に、主がわたしに示されたことをあなたに伝えているのである」（教会への証第5巻67）。

## インタビュー

「彼（G・A・アーウィン長老、世界総会総理）は小さいノートブックを持っていて、それにいろいろのむずかしい問題を書きとめ、わたしのところへ持ってくる。そして、もしそれらの点について、何か光があれば、わたしはアメリカだけでなく、この国の信者のためにも書くつもりである」（E・G・ホワイト手紙96, 1899年メッセンジャー117）。

## 光がなかった時

「その問題（14万4千はだれか）」については光がない。…どうか兄弟たちに彼らが書いている事がらについては何も示されていない。そして、わたしは示されたことを伝えることができるだけであると伝えてほしい」（C・C・クライスラーの手紙中に引用されたもの、1914年12月8日）。

「わたしには将来の働きについて、兄弟たちに書く自由はない。

なぜならば、主はそうすることをわたしにお委ねにならなかったからである。わたしは、あなたがどこに場所を定めるべきか、または、将来どうすべきかについて、何の指示も受けていない。…もし主があなたに関するはっきりした指示をお与えになったならば、わたしはそれをあなたに伝える。しかし、わたしは、主がわたしに伝えるようにお与えにならないことの責任をわたしは負うことはできない」(E・G・ホワイト手紙 96, 1909 年、メッセンジャー 116)。

### わたしは話すことができた

「今朝、わたしは、ある問題を考慮するために召集された数名の選ばれた人々の会合に出席した。このような問題の考慮と勧告を求める手紙が彼らのところに来たのである。わたしは、それらの問題のいくつかについては、いろいろの時と場所において、多くの事が示されていたので、話すことができた。…兄弟たちが手紙のところどころを選んで読んだときに、わたしは、彼らに何を言うべきかがわかった。なぜならば、この事は、わたしに繰り返して示されたからである。…わたしは、ただいままでこの事について自由に書いてよいと感じなかった。他の伝道地と同じ方法では働くことはできないということであった。…」(南部の働き 9, 98)。

## 18. 幻とホワイト夫人の証との関係

### (1) 証、一つの幻の直接の説明

「1850 年 8 月 24 日に、わたしは…見た」(初代文集 59)。

### (2) 証、多くの幻の合成的説明、大争闘シリーズ

「時々、わたしは、いろいろの時代における大争闘の働きなどを見ることをゆるされた」(各時代の争闘序文 8)。

### (3) 証、特定の幻に基いた勧告

「1907年3月2日の夜、われわれの出版物の価値に関して多くのことがわたしに示された」（教会への証第9巻65）。

#### (4) 証、多くの幻に基く累積的勧告

「神はあなたが子供を扱うように、子供たちを扱う親たちのために、譴責の証をわたしにお与えになった」（E・G・ホワイト手紙1, 1877年）。

「この事は、同類のことについて、自分たちは、セブンスデー・アドベンチスト教会に対して使命を持っていると主張した人々の他の場合に、わたしに示された。そして、『彼らを信じるな』という言葉がわたしに与えられた」（E・G・ホワイト手紙16, 1893年、セレクトッド・メッセージス第2巻63, 4）。

### 19. パウロは、危険を前もって示された

「パウロは靈感を受けた使徒であったが、主は、神の民の状態がどのようなものであるかをいつも彼に示されなかった。教会の繁栄に関心を持っていた人々が、教会に害悪が進入しているのを見て、そのことを彼に話した。そして、彼は以前に受けた光に照らしてみても、こうした事情の真相を判断することができた。主は、その特別の時のために新しい啓示をお与えにならなかったからといって、真に光を求めていたものは、彼の使命を単なる一般の手紙として捨て去らなかった。決してそうしなかった。主は彼に教会の中にかかる困難と危険とを示された。それが起こったならば、彼は、それをどのように扱うべきかを知ることができるのであった。

彼は教会を擁護するために立てられた。彼は、神に申し開きをしなければならぬ者のように、魂を見守り、無秩序状態や分裂に関する報告に心を奪われてはならなかった。そして、彼が彼らに送った譴責は、彼のどの手紙とも同様に神の靈感によっ

て書かれたものである」(教会への証第5巻65,6)。

## 20. 彼女自身の言葉で表現された証

「わたしは、幻を受けるのと同様にそれを書くことにおいても、主の霊に依存しているけれども、わたしが見たことを描写するのに用いる言葉は、わたし自身のものである。ただし、天使がわたしに語った言葉は、常に引用符でかこんだ」(レビュー・アンド・ヘラルド1867年10月8日、セレクトッド・メッセージス第1巻37)。

### ホワイト夫人、W・C・ホワイトの言葉を支持

「母は、逐語靈感を主張したことがない。また、父やベーツ、アンドリュース、スミス、ワゴナー長老たちもそう主張したのを見出さない。もしも母が逐語靈感によって原稿を書いたのであれば、なぜ、追加したり、書き直したりする仕事をしたのであろうか。母は、しばしば自分の原稿を注意深く見直して、思想をさらに発展させる追加をしている」(W・C・ホワイト、1911年10月30日世界総会々議にて、注と記事126,7)。

世界総会決議-1883年、「われわれは、神がそのしもべたちに光を与えられるのは、心に光を注いで思想を与えることによるのであって、(まれな場合は別として)思想が表現される言葉そのものによるのではないと信じる」(世界総会議事録、レビュー・アンド・ヘラルド1883年11月27日)。

## 21. 誤りがないことの問題

聖書 「『筆記者や翻訳者になにかの間違いがあったのではなかろうか』とまじめにわれわれにむかって言う人々がある。それはあり得る。そして、この可能性または、実現性のために、ためらい、つまりくほどに心の狭い人は、その弱い心が神の目的を見通すことができないために、靈感による聖書の神秘にも同様にすぐ、

つまずいてしまうのである。……どんな誤りであっても、最も明白に啓示された真理をむずかしく考えようとしない魂を悩まし、あるいは、どの人の足をもつまずかせることはできない」(遺稿 16、1888 年、セレクトッド・メッセージス第 1 巻 16)。

## 神と天だけが無謬である

「われわれは多くの教訓を学び、また多くの学んだものを捨てなければならない。神と天だけが無謬である。自分たちの大切にしている考えを捨て、意見を変えるような事はあるまいと思っている人々は失望するであろう。われわれが、自分自身の考えや意見に固執している限り、キリストが折られた一致はあり得ない」(レビュー・アンド・ヘラルド 1892 年 7 月 26 日、セレクトッド・メッセージス第 1 巻 37)。

「無謬ということについて、わたしはそれを主張したことはない。神だけが無謬である。神の言葉は真実であって、神には変化も回転の影もない」(セレクトッド・メッセージス第 1 巻 37)。

神性と人性の結合 「聖書は、神がその著者であると言っている。しかし、それは人間の手によって書かれた。そして、その種々の書の異なった文体は、それぞれの著者の特徴をあらわしている。啓示された真理は、すべて「神の靈感を受けて書かれた」のである(テモテ第 2・3:16)。しかし、それらは、人間の言葉で表現されている。無限の神が、神の聖霊によって、神のしもべたちの心に光を照らされたのである。神は、夢、幻、象徴典型をお与えになった。そして、このようにして真理の啓示が与えられた者は、自分たちでその思想を人間の言葉で表現したのである。

十戒は神ご自身が語り、神ご自身の手で書かれたものである。これは神がお作りになったもので、人間が作ったのではない。しかし、聖書は、神がお与えになった真理が人間の言葉で表現されているから、ここに神と人との結合がある。このような結

合はキリストの性質にもあるのであって、キリストは、神のみ子であり、人の子でもあられたのである。こうして、「言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った」と言うことは、キリストにおけると同様に、聖書についても言えるのである（ヨハネ 1:14、各時代の争闘序文 2）。

## 22. ホワイト夫人の判断

「彼とあなたとは、自分たち自身の判断についての意見を明らかにし、それがホワイト夫人の判断よりも信頼できるものであると言った。ホワイト夫人は、主のための奉仕の生涯において、ちょうど、このような出来事を扱い、あなたの場合と類似したのや、他に多くの異なった種類の出来事を扱ってきたので、これらの事において何が正しく何が間違っているかを知っているはずであるとあなたは考えないであろうか。50年以上にわたって神の訓練を受けた判断は、その訓練も教育も受けない者よりは、優れていないであろうか。どうか、こうしたことを考えてほしい」（手紙 115, 1895 年ファニー・ボルトン宛）。

## 23. E・G・ホワイト著書で靈感によらないものがあるか

（エレン・ホワイトは日常の会話、または、単なる伝記的記事は、靈感によるものであると言わなかった。これは、霊の賜物第 2 巻 1860 年出版に説明されている。霊の賜物第 1 巻 1859 年出版のものと比較）

### ① 第 1 巻の権威、大争闘の幻、冒頭の言葉

「主はわたしに…示された」「そして、わたしは…を見た」霊の賜物第 1 巻 17。「そして、わたしは…見た」「またわたしは…見た」（同 218）。

### ② 第 2 巻 伝記的記事

「次の記事を準備するに当って、わたしは、大きな不便を感じな

がら苦勞した。というのは、わたしは、ほんの数年前まで日記をつけていなかったもので、多くの場合記憶にたよらなければならなかったからである。わたしは、数回にわたって、わたしが記述した事情が起った時に居合わせた友人たちに原稿を送って、印刷に回す前に彼らに調べてもらった。わたしは、単純な事実を出来るだけ正しく述べるように努めて、注意深く多くの時間をかけた。しかし、わたしは、自分の書いた多くの手紙によって年代を決定するのが大いに助かった」（霊の賜物第2巻序文）。

### ③ 付録の言葉

「特別のお願いであるが、もしこの本の中に何か間違ったところがあれば、すぐわたしに知らせて頂きたい。この版は10月の始めに完成されるので、それまでに送って下さい」（最初の400冊の付録）。

「神聖なことと一般のこと」パラダイス・バレー病院の部屋の数に関する情報は、主からの啓示でなくて、単なる人間の意見として言うだけである。われわれのどの病院についても、部屋の正確な数が啓示されたことはなかった。そのような事に関するわたしの知識は、知っていると思われた人々に聞いて得たのである。このような日常の事について、わたしが発言するときに、これは、わたしが幻によって得た知識であると人々に思わせ、また、わたしがそう言っていると思わせるものは何もない。……

「聖霊が、主の働きに関係のある伝道機関に関して何かを啓示される時、または、神の働きについて、人間の心に啓示をお与えになるとき、これまで、わたしによって、これらのことが啓示されたのと同じように、その使命は、それを必要としているものにとって、神からの光とみなされなければならない。しかし、神聖なものに俗なものを混ぜることは、大きな間違いである。このような傾向の中に、魂を亡ぼそうとする敵の働きを見ることができるのである。……」

「しかし、普通のことを言い、普通のことを考え、普通の手紙を書くことが必要なときがある。また、知らせが働き人から働き人に伝わるがあった。このような言葉や知らせは、神の霊の特別な靈感によって与えられたものではない。時には、全然宗教的でない問題について質問をうけることがあって、そのような質問に答えなければならない。われわれは、家や土地、なすべき商売われわれの伝道機関の場所、その有利な点や不利な点について話さなければならない」（E・G・ホワイト遺稿 107、1909年、セレクトッド・メッセージス第1巻39）。

#### 24. 「わたしは見た」と「わたしは示された」

ホワイト夫人は、一般の読者のための書物の中からは「わたしは見た」と「わたしは示された」という表現を全部取り去られた。それは、読者が彼女の経験をよく知らないから、使命それ自身から心をそらすことがないためであった。大争闘シリーズ5巻にこのような表現を見つけることはできない。しかし、このシリーズの最初に1888年に出版された各時代の争闘序文において、ホワイト夫人は、このような事件が起こるのを目撃し、「あらわされたことを他の人々に知らせるように命じられた」ことを明らかにしている（11）。キリストへの道、祝福の山、キリストの実物教訓、教育、ミニストリー・オブ・ヒーリング参照。「ホワイト夫人はこれらの書物の創作者ではない」と彼女は書いた。

伝道的著作以外のもので、ホワイト夫人が、公にされた著作は、「わたしは見た」という表現があるなしにかかわらず、彼女に与えられた幻に基づいている。彼女は、その時代において、書物と手紙という区別ではなくて、神聖なことと普通のことという区別をされた。われわれも、今日同様である。知性のある人は、混乱におちいることはない。

#### 25. E・G・ホワイトの著書は終わりまで語る

「最後の時代のわが教会の人々に、豊かな光が与えられた。わたしの生命があるなしにかかわらず、わたしの書いたものは、絶えず語る。そして、その働きは、時が続く限り前進する。わたしが書いたものは、事務室のファイルに保存されていて、わたしが生きていなくても、主からわたしに与えられたこれらの言葉は、なお生きて人々に語るのである」（教会への証を書いて送りだす、13, 14、1907年10月23日に書かれたもの。セレクトエッド・メッセージ第1巻55）。

# もうひとりの特別の 使命者が現れるだろうか

エレン・G・ホワイト著書刊行会

書記　　アーサー・L・ホワイト

## 質問

ホワイト夫人は、神が残りの教会に預言の霊によってお語りになる唯一の人であろうか。それともその任務を果たすために別の人があらわれるであろうか。

## 答

ホワイト夫人が亡くなった時に、預言の霊が残りの教会に将来現れるだろうかと言うことが関心の一つであった。実は、ホワイト夫人は、その最後の数年において、働き人を訪問した時、または、書き物によって数回にわたって自分が年を取ったことと、自分の生涯の働きを終えることについて語った。このような事情の下において、将来のことについて、「もうひとりの特別の使命者が現れるでしょうか。神は、ホワイト夫人によって語られたように、また、別のだれかを選んで、神の民に語られるでしょうか」と言う質問がなされることは当然であった。

このような質問に答えて、ホワイト夫人は将来預言の賜物が現れることに関して、主は彼女に光をお与えになっていないと、いつも答えた。彼女は与えられた光は彼女の死後も教会を指導し守護するという確証の言葉をしばしばつけ加えた。

## 預言者の任命が与えられたと主張した人々

ホワイト夫人の生涯の最後の10年間に、自分は、ホワイト夫人の後継者として召されたと感じた人々が数多くあった。彼女に手紙を書いた人もあれば、会いに来た人もあった。それぞれは、自分が彼女の後継者であることを確証する承認の言葉が与えられることを確信していた。W・C・ホワイトは、長年、母の著述の仕事を手伝っていたが、1915年に次のように語った。

「12人、または、もっと多くの人々が、時折、現れて、その中のある人々は、ホワイト夫人が働きを止めて、彼らが引き継ぐべき時が来たと主張した。他の人々は、自分たちが彼女の後継者として神に選ばれたと主張した。ある人々は、ホワイト夫人に会うために遠方から旅行をして来て、彼らが彼女の後継者として選ばれたことを啓示されたと言い、もし彼女が彼らを見るならば、彼らを認めて、彼女が死ぬならば、この人々が彼女に代わって行動するために神に選ばれた人々であると証するだろうと言った。彼女がこの人々に会い、彼らの主張、彼らの提案、彼らの議論、彼らの願いなどを聞いたとき彼女は彼らについて何の命令、何の教えも受けていないと彼らに言った。こうした善良ではあるが誤り導かれた人々のあるものは、彼らの友人たちの言うことに耳を傾け彼らの空想に基づく主張を取りやめた。他のものは、長年にわたって、聖書の奇抜な解釈を書いて発行し、彼らの主張と注解を受けいれない人々を非難した」(バトルクリーク・エンクワイアラーに報告、1915年7月25日)。

1912年、まだホワイト夫人が存命中であったが、後継者の点についての手紙に答えて、W・C・ホワイトは次のように書いた。

「過去5年の間に、母は、この姉妹と同じように感じる人から6通から8通の手紙を受け取っていることをあなたも知られて興味をお感じになると思う。この人々は、神が彼らに預言の霊を与えられたと感じて、彼らのために証をするように神はホワイト夫人に指示されると思っている。母は、これらのすべての人に対して、同じ返事を出し、彼ら

が特別の働きに召されたことに関して、神からは何の指示も受けていないと言わなければならなかつた。・・・

われわれの兄弟たちが、彼女の死後は、神が彼女にお与えになった特別の働きの重荷をだれが負うのだろうか、ときどき母にたずねるのであったが、母は、わたしは知らないと言った。神は、この事を彼女にお示しにならなかつた。そして、神は神のしもべたちに指示を与え神の無限の知恵と目的をもって神の働きを進めることが十分におできになるので、彼女はこの事については心配しなかつた」(W・C・ホワイト手紙、1912年10月6日)。

## わたしが書いたものが常に語る

ホワイト夫人は、将来について少しの不安も持っていなかつたことが、1907年の次の言葉で明らかである。

「最後の時代のわが教会の人々に、豊かな光が与えられた。わたしの生命があるなしにかかわらず、わたしの書いたものは、絶えず語る。そして、その働きは時が続く限り前進する。わたしが書いたものは、事務室のファイルに保存されていて、わたしが生きていなくても、主からわたしに与えられたこれらの言葉は、なお生きて人々に語るのである」(教会への証を書いて送り出す 13, 14)。

以上と同じ点に関し、W・C・ホワイト長老は、1922年に次のように報告した。ホワイト夫人は彼女の出版された著書を指し示して、「ここにわたしの書いたものがある。わたしが亡くなったときにこれらがわたしに代わって証をする」と言った(W・C・ホワイト手紙、1922年7月9日)。

この証は、将来に関してホワイト夫人の言葉を聞いた他の働人の証と完全に一致している。その中のひとはM・N・キャンベルで、この事について1943年2月3日に次のように書いた。

「ホワイト夫人の怪我の数か月前、モントゴメリ長老とわたしともう

ひとりの兄弟が「エルムスヘーブン」宅の彼女を訪れた。W・C・ホワイト長老とマックエンターファー姉妹がこのインタビューに立会った。会話の途中で、わたしは、ホワイト夫人に、イエスの再臨まで彼女が生きるかどうかについて、何か光があったかを聞いた。彼女は、その時まで生きるか生きないかについては光がないと答えた。

わたしは、彼女が主に生命を支えられて、キリストの再臨までの地上の大争闘をみることができると熱心に希望すると言った。なぜならば、「もしあなたがいなくなれば、あなたの後継者であると主張するあらゆる種類の狂信者が起ってわれわれを悩ますだろう」と言った。

彼女は静かに、「主は彼の事業を完全に守ることがおできである」と答えられた。

そこで、もし主が彼女を休みに召されるとすれば、だれか別の人が彼女の代わりに起るだろうかと聞いた。その時、彼女の椅子に付いていた書き物用のテーブルの上に彼女の数冊の本が横たわっていた。彼女は手をそれらの書物の上にのぼして、これらの書物の中に、わが教会の人々のこれから先きの旅路のために必要な指示が記されていると言った。

## 神は神の働きを守られる

ホワイト夫人の後継者の問題は、1915年に彼女が亡くなった時に痛切に感じられたことは当然である。これは教会だけでなく、一般社会にとっても興味ある問題であった。彼女の書いたものに対して、その死はどういうことを意味するであろうか。だれか預言の賜物を与えられた後継者が起るであろうか。彼女の葬式の日、ミシガン州、バトルクリークで、彼女の息子、W・C・ホワイトはバトルクリーク・エンクワイアラー紙の記者とインタビューした。

次は、「ホワイト夫人は後継者を考えず」という大きな標題のもとに掲載された1915年7月25日の新聞記事である。

「故エレン・G・ホワイトの息子、セントヘレナのウィリアム・C・ホワイトは、過去 34 年間、彼女の事務の処理者であり、また、25 年間、セブンスデー・アドベンチスト世界総会委員会の一員であった。ホワイト夫人がこのように深い関係を持っていた教会に対して、彼女の死がどんな影響を及ぼすかについて、われわれは昨日彼にインタビューを行った。『ホワイト夫人は後継者を選んだか』と言う質問に対して、彼は次のように答えた。

『いいえ、彼女は、その事に関する権限は自分には何もないと思っていた。そして、彼女は彼女の働きの後継者として、だれにも指名の意思表示をしなかった』

『彼女は、だれが後継者になるか知っていたか』と聞いた。

『それは彼女が何度も聞かれた質問である。そして、彼女は、それは彼女に啓示されていないことで、その事について言うべき知識も情報もないと常に言っていたとホワイト氏は続けた』

『彼女は彼女の働きを続けるために、別のだれかが選ばれることを知っていたか』

『これも、彼女が何度も聞かれた質問である。そして彼女はそれについても知らないと答えた。同時に彼女は、神が神の働きを守護されることに完全な信頼を表明し、この事については、彼女も他の人々も心配する必要がないと言った』

『教会の指導者たちは、彼女のした仕事を続ける人を選ぶだろうか』というのが次の質問であった。

『いいえ、指導者たちは、神が神の使命者を選ばれると信じている。また、彼らは預言の霊が与えられる人を人間が選ぶということは、せんえつなことであると考えている』(1915 年 7 月 25 日バトルクリークエンクワイアラー)。

W・C・ホワイトのこの点に関する理解は、同時代の他の働き人の理解したことと一致している。J・N・ラフボローは、彼女の後継者がだ

れであるかをホワイト夫人は知っていたらどうかと人から質問された。それに答えて、彼はS・N・ハスケルとホワイト夫人との最近の会話に触れて、その中で彼女が教会にはすでに十分な光が与えられていて、彼らが従いさえすれば、それは最後まで彼らを導くのに十分なものであると言われた言葉を引用している。

F・M・ウィルコックスは、ホワイト夫人が亡くなった後、しばらくして、レビュー・アンド・ヘラルドの社説の中で、多くの人々の心の中で関心が高まっていた問題を扱い、次のように言った。

「これは、主ご自身だけが答えることができる問題であって、われわれが知っている限りにおいて、神はこの事について神のみこころをだれにもお知らせになっていないのである」(レビュー・アンド・ヘラルド、1915年8月19日)。

こういうわけで、ホワイト夫人も、同時代の人々も、将来どうなるかについては、何の光もなかったことが明らかである。これは、一つの残された問題である。神は、ホワイト夫人によって語られたように、また、だれかを選んで語られるかもしれない。あるいは、そうでないかも知れない。われわれは、1915年7月16日におけると同様に、今日においても、この問題については、一步も解答に近づいていない。

以前と同様にその後も自分は預言者の務めを与えられたと主張した人々が起こったことは事実であるが、彼らの働きは試練に耐えなかった。われわれは、明瞭に警告と勧告が与えられている。

「幻を見ると主張する人々があるであろう。神がその幻が神からのものであるというはっきりした証拠をお与えになるときに、それを受けいれてもよい。しかし、それをその他の証拠に基づいて受けいれてはならない。なぜならば、人々は、外国やアメリカにおいて、ますます誤った方向へ導かれるからである。主は人々が良識ある男女のように行動することをのぞまれる」(レビュー・アンド・ヘラルド、1905年5月25日)。

## 預言者に関する聖書的テスト

1915年のホワイト夫人の死去以来、セブンスデー・アドベンチストは、預言者の務めを主張するものは、ホワイト夫人のように聖書のすべてのテストに適したものでなければならないことを信じてきた。それは、次にあげるようなものである。

1. 「その実によって彼らを見分ける」(マタイ 7:16)。
2. 「ただ律法(教)とあかしとに求めよ。もし彼らがこの言葉によって語らなければ、そこには夜明けがない」(イザヤ 8:20、英語訳)。
3. 預言の成就(エレミヤ 28:9、申命記 18:22)。
4. キリスト、彼の受肉、われわれのための彼の働きに対する態度(1ヨハネ 4:2,3、1テモテ 3:16)。

また、次のような重要な証拠をあげることができる。

1. 預言者が啓示を受けるその方法
2. 使命の適時性
3. 使命の重要性
4. 預言者と称する人自身の個人生活

以上のテストや証拠を、自分は預言者の務めに召されたと主張する人々にあてはめるならば、誤りに導かれる心配はない。はっきりしたことが一つある。もし主が、ふたたび預言の賜物によって語られるとするならば、その使命は、すでに与えられた聖書と預言の霊の著書と完全に一致することである。

## 結 論

しかし、聖書の時代には、たくさんの預言者がいたのに、残りの教会には、何故ただひとりしかいないのかとたずねる人があろう。昔は、神のために証をする人々が次から次へと召された。時には、同時にふたりの預言者がいた。ここで考慮すべきことは、聖書時代に、預言者は、使命を口頭で伝えたということである。ある場合には、非常な努力によって手で写されたこともあるが、巻物は一般に入手が困難で、指導者がそれを失ってしまうこともあった。そこで、主は、繰返して口頭による証を人々に伝えなければならなかった。口頭による使命は、すぐに忘れ去られた。そこで次々に人々が神のために証をするために召された。

今日、預言の霊は、英語だけでなく、世界の他の主要な国語で印刷されている。それは広く配布されている。これらの書物は、それを入手するすべてのセブンスデー・アドベンチストの家庭で証をする。これらは、われわれの教会の講壇から読まれ、われわれの機関誌の中に繰返し印刷されている。こうして、エレン・ホワイトは、次のように言ったのも当然のことである。

「わたしが生きていようといまいと、わたしが書いたものは、語りつづけ、その働きは時が続く限り前進する」

もし、われわれが、これらの勧告に注意に心をとめ、われわれに対する神のみこころと教会に対する神の教訓を知るために、これらの使命を研究しさえすれば、神は別にもうひとりの人を起すのと同様に、ただひとりの選びの器によってでも、神の働きを完成することがおできになるであろう。

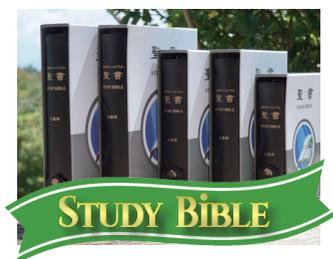
いづれにせよ、エレン・ホワイトが、神はその働きをまもり、「終わりまで」神の民と共におられるのであるという確信を持たれたように、

われわれも確信をもって、心安んじていることができる（ライフ・スケッチス 438）。彼女の記録された最後の言葉の中に、教会の指導者に対する確信の表現があった。それは、次のような言葉である。

「わたしは、わが教会の人々のために証をすることはもうないと思う。しっかりした考えを持ったわが教会の人々は、働きの向上と建設のために、何がよいことであるかを知っている。しかし、彼らは、心に神の愛をもって、神の事をますます深く研究する必要がある」（レビュー・アンド・ヘラルド 1915年4月15日、キリスト教教育の基礎 548 に転載）。

もし大争闘の最後の時代に、神がもうひとりの生きた使命者に語ることを選ばれるとするならば、神ご自身がその目的のために人を選ばれる。そして、その事は教会の中で、「ダンからベエルシバまで」その人が「主の預言者」であると知られるのである（サムエル記上 3：20）。

もっと詳しく研究なされたい方のために...



## スタディバイブル

口語訳・注解・  
脚注引照付き・地図  
チャート・聖句索引

¥8,000～

色はすべて黒で本草を使用

宇宙の謎、地球の謎、人生の謎に真実の解決  
を与えるのは聖書だけです。スタディバイブルは自分で研究できるように編集されてい  
ます。

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

## 預言の声に関する指導原理 －リバイバルシリーズ－

※頒布価格 200 円

発行 平成 24 年 1 月 16 日  
著者 アーサー・L・ホワイト  
発行所 サンライズミニストリー  
〒 905-0428

沖縄県国頭郡今帰仁村今泊 1471

電話 0980-56-2783

FAX 0980-56-2881

Email [info@sunriseministry.com](mailto:info@sunriseministry.com)

[www.sunriseministry.com](http://www.sunriseministry.com)



# リバイバル小冊子シリーズ

---

No. 1 安息日問答

No. 2 アピール

No. 3 装身具について

No. 4 狭き道の旅

No. 5 リバイバルと改革

No. 6 神の聖安息日の遵守

No. 7 今

No. 8 終末時代における霊の賜物

No. 9 小さな光と大きな光

No.10 預言の霊に関する指導原

No.11 サタンのわな

No.12 人類が直面している世界情勢

No.13 田舎の生活

No.14 十戒

No.15 主のぶどう園

No.16 背教のアルファ

No.17 終わりの時に備えよ

No.18 どのようにして安息日を守るか

No.19 キリスト論

No.20 救いの確証

No.21 もうひとつの箱船

